

演劇祭による観光への時空間的影響

—豊岡演劇祭2022を事例とした試行的分析—

直井岳人 野津直樹 河村竜也

Spatio-temporal Impact of a Theater Festival on visitors :

Tentative Analysis taking Toyooka Theater Festival 2022 as a Case

NAOI Taketo NOZU Naoki KAWAMURA Tatsuya

Abstract

This study aims to shed light on the interrelationship between theater festival visitors' on-site behavior and their evaluation of the festival and each of the following variables, namely the number of neighboring tourist destinations visited (the spatial impact) and visitors' intention to visit outside the festival period (the temporal impact). The data to achieve the research purpose was obtained from the official questionnaire survey of visitors to the Toyooka Theater Festival 2022. Responses from 509 visitors who resided outside the festival venue at the time of the survey were subjected to analysis. As a result, a significant positive correlation was found between "the total number of places visited" and "the number of annual theater performances attended" as well as "the number of performances viewed." "Intention to revisit the venue" was also significantly correlated with "the number of annual theater performances attended," "impressions of theater festivals," and "intention to revisit the theater festival." These results point to the spatio-temporal effects of theater festivals on visitor behavior.

Key words: Spatio-temporal Impact, Theater Festival, Visitor Behavior, Visitor Evaluation

(2023年3月13日受付, 2023年7月5日受理, 2023年9月30日発行)

1. はじめに

訪問客が芸術祭に参加する現象は、訪問客が文化資源を訪れる現象である文化観光 (Tahana & Opperman, 1998) の側面を持つ。多くの芸術祭では、地元住民への芸術鑑賞の機会の提供などの地域貢献に加え、開催地への訪問客誘致が目指されている (Hughes, 2000)。芸術祭は、特定期間に芸術を魅力要素として開催されるイベントだが、開催時期中の周辺観光地への回遊、会期外の開催地への誘客の機会になることも期待されている。しかし、このような、来場者の会期中の回遊及び会期外の開催

地訪問が生じるしくみは明らかにされていない。

本研究では、芸術祭の一形態である演劇祭への来場者を対象とし、彼らの観劇行動及び芸術祭に対する評価と、来訪した主な周辺観光地の数 (空間的影響)、演劇祭期間外の開催地再訪意向 (時間的影響) の相互関係を明らかにすることを目的とする。本研究では、兵庫県の豊岡市、養父市、香美町で開催された豊岡演劇祭2022の公式来場者アンケートへの、調査時に同演劇祭開催地 (豊岡市、養父市、香美町) 外に居住していた来場者からの回答を、研究目的を達成するためのデータとした。

2. 研究の背景

世界観光機関による観光の定義 (UNWTO, 2008) が、商用など、楽しみ以外の目的を持つ行動を含める通り、学術的および実務的観光分野においては、主目的に伴う副次的な観光があるという認識がある。例えば、MICE参加者の動機に関する研究には、主目的に関わる会場やプログラムの特性に加え、開催地の立地や魅力に関する動機を含むものがある (Yoo & Chon, 2005 など)。また、参加型スポーツに関する研究において、マラソン大会参加意向に開催地への愛着が及ぼす影響を明らかにした研究がある (Funk, Toohey & Bruun, 2007 など)。このように、イベント開催地の特性が参加者の誘因要因になる可能性が指摘されている。ただ、イベントの会期中の来場者の周辺への回遊行動、イベントの会期外の開催地への再訪意向への影響要因を明らかにしたものは見当たらない。

先述のように、多くの芸術祭では開催地への訪問客の誘致が目指されている。舞台芸術は来場者が上演時間前後に時間的余裕を持つ必要があり、特に演劇祭で複数の作品を鑑賞する場合、来場者が会場外で過ごす時間が生じやすいと考えられる。つまり、演劇祭の開催期間中の回遊行動という副次的な観光が生まれやすい文脈だと考えられる。しかし、本研究が対象とする演劇祭の来場者に関しては、特定演劇祭を対象とした来場者行動調査の結果は報告されている (直井・野津・河村, 2022) が、来場者の観劇経験と彼らの回遊行動および会期外の開催地への再訪意向との関係を明らかにした研究は見当たらない。

こうした研究のリサーチギャップを埋めるための実証的研究に資する示唆を得ようとするのが本研究の位置づけである。先述した通りの実証的先行研究の不足のため、現段階で、理論的仮説を基に、来場者の観劇経験が持つ、開催地の観光への空間的影響と時間的影響を説明する要因間因果関係モデルを構築し、検証することは難しい。そこで、本研究では、関連要因間の関係に関する示唆を得るため、兵庫県の豊岡市、養父市、香美町で 2022

年9月に開催された豊岡演劇祭 2022 の公式来場者アンケート中の研究目的に関連する質問項目への、調査時にフェスティバル開催地外に居住していた来場者からの回答を、研究目的を達成するためのデータとし、来場者の観劇経験、彼らの回遊行動、会期外の開催地への再訪意向を示すと思われる回答間の相関関係を分析した。

なお、調査の概要を説明する前に、本調査の調査設計上の主な制約について述べる。まず、豊岡演劇祭 2022 の公式来場者アンケート調査は、毎年の来場者の傾向を把握することを主目的として実施されるものであり、本研究では分析対象とならない質問項目が含まれる。これらの質問に回答したことが、回答疲れなど、本研究で分析対象とする質問項目への回答に影響を与えた可能性は排除できない。また、豊岡演劇祭 2022 公式来場者アンケートでは、アンケートのレイアウト、回答のしやすさ等、本研究の目的以外の要素を考慮した質問設計がなされている。更に、豊岡演劇祭 2022 は開催 2 回目となり、1 回目と 2 回目の調査間で回答形式を合せて比較をする必要があるため、質問形式の変更が難しく、結果的に本研究の目的に照らして最適な尺度が採用されなかった場合がある。例えば、順序尺度が採用されたため、間隔尺度を前提にした統計解析が採用されない等、統計解析の種類の幅への影響がある。最後に、前述の通り、本研究は要因間因果関係モデルを理論的仮説に基づいて構築し検証するものではないため、分析では構造方程式を用いた検証は行わず、来場者の観劇経験、彼らの回遊行動、会期外の開催地への再訪意向を示すと思われる回答間の相関係数を算出し、その有意性を検証するにとどめる。こうした要因間の有意性は、本来はモデルの中で検証されるべきものであり、ここで検証された要因間の関係は、あくまで、将来の研究での検証モデル構築のための手掛かりを示すものとして解釈されるものとする。

3. 調査概要

豊岡演劇祭 2022 の公式来場者アンケート調査で

は、2022年9月15日(木曜日)から9月25日(日曜日)までの会期中に、メイン会場¹⁾でA4両面1枚アンケートが客席留置き方式で配布され、来場者退場時に回収された²⁾。また、紙媒体のアンケート用紙には、同じ内容のWEBアンケート(Google Form)にアクセスするためのQRコードとURLが印刷され、WEBアンケートでの回答も可とした。また、WEBアンケートの回答期間は、周遊旅行中に豊岡演劇祭を組み込んだ来場者がいる可能性に鑑み、旅行終了後にも回答可能とするため、9月30日(金曜日)とした。なお、開催期間を通して1度のみアンケートに回答するよう依頼した。

以上のアンケート調査の結果、1,124名分の回答が得られた(内、WEBアンケートによる回答は68名)。ちなみに、同演劇祭の延べ来場者数は18,250名であった(豊岡演劇祭実行委員会,2022)。なお、同アンケートへの回答のうち、同演劇祭の開催地である豊岡市、養父市、香美町からの来場者は演劇祭開催地の住民とみなし、これら2市1町からの来場者からの回答を除く、509名分の回答を分析対象とした。観光統計における訪問客(visitor)の定義(UNWTO,2008)³⁾では、訪問地までの移動距離は問うておらず、これら2市1町からの来場者を訪問客とみなさない学術的根拠は弱い、これらの来場者が開催地に居住しているために彼らの会期外の

開催地への再訪意向を問うことができないことから、本研究では分析の対象外とした。

4. 分析概要

豊岡演劇祭2022の公式来場者アンケートの質問項目の内、本研究の分析対象となった主な項目(変数)は表1の通りである。

表1に示す選択肢の内、①などの丸付きの数字は、アンケートの文言に含まれていないが、データ入力時に変換した数値を表している。例えば、「①今回が初めて」は1に変換している。また、変数の内、「年間観劇回数」は「⑤それ以上」が選択肢に含まれること、「演劇祭再来場意向」、「開催地再訪意向」は、それぞれ「たぶん行かない」が選択肢に含まれないことから、程度を表す尺度だが等間隔ではないと考え、順序尺度であり、間隔尺度ではないと理解する。表1中のそれ以外の4つの変数は、等間隔だとみなしうると考え、順序尺度であり、間隔尺度でもあると捉える。表1に示す変数以外の、回答者の特徴を把握するために分析対象とした質問項目は、分析結果で報告する。

分析では、表1に示す7つの変数間の相関係数を算出し、その有意確率を算出した。また、前述の通り、これらの変数のうち3つは、等間隔が仮定でき

表1 本研究の分析対象項目(変数)

変数名	質問の文言	選択肢
年間観劇回数	例年の年間の演劇鑑賞の頻度についてお教えてください。	①今回が初めて、②年に1-2回、③年に3-4回、④1-2カ月に1回、⑤それ以上 より1択
演劇祭主目的度	今回の旅行は豊岡演劇祭2022が主な目的ですか。	(はい) ← 4・3・2・1 → (いいえ) で、あてはまる数字を1択
演劇祭感想	豊岡演劇祭2022の全体的な感想をお聞かせください。	④大変良かった、③良かった、②普通、①良くなかった より1択
鑑賞作品数	豊岡演劇祭2022ではどれくらいの作品を観劇されましたか(観劇予定を含む)。	実数を回答
訪問地合計数	今回訪れた場所、または今回訪れる予定の場所があれば教えてください。	その他を含む28選択肢(場所) ⁴⁾ を複数回答可で選択してもらい、選択された場所の実数を集計
演劇祭再来場意向	来年度も豊岡演劇祭にお越しいただけますか。	④絶対行く、③たぶん行く、①行かない、②わからない より1択
開催地再訪意向	豊岡演劇祭の開催期間外に豊岡演劇祭2022の開催地にまた行きたいと思いませんか。	④また行きたい、③たぶん行く、②わからない、①行かない より1択

ない順序尺度で、間隔尺度ではないと見なされるため、順序尺度で測定された変数間の相関の正負の方向と強度を算出できる、Spearmanの相関係数を用いることとした。なお、Spearmanの相関係数は、データの分布の正規性を前提とせずに算出されるため、各変数の正規性の検定は行わない。

5. 分析結果

回答者の特徴

回答者の特徴は表2に示すとおりである。

性別は、男性あるいは女性という回答がほぼ同じ割合で合わせて大半を占め、年齢は中年層が目立つ。また、同伴者がいた回答者、宿泊した回答者が多い。訪問地は、城崎温泉と豊岡市街地が目立ち、加えて、以上の2つの訪問地のいずれかから、徒歩あるいは公共交通機関を利用して30分以内の3か所が、回答者の10%以上より回答されている。

次に、本研究で対象とする7つの変数(表1)の回答結果を報告する。実数がデータとなる「鑑賞作品数」、「訪問地合計数」については、選択肢の数が決められていないため、記述統計を算出し、「鑑賞作

表2 回答者の属性と行動

属性	選択肢	人数	割合 (%)
性別 (1択)	男性	223	43.8
	女性	267	52.5
	その他	2	0.4
	回答しない	8	1.6
	無回答	9	1.8
年齢 (1択)	15歳未満	6	1.2
	15-24歳	68	13.4
	25-34歳	60	11.8
	35-44歳	80	15.7
	45-54歳	95	18.7
	55-64歳	125	24.6
	65-74歳	54	10.6
	75歳以上	16	3.1
	無回答	5	1.0
同伴者 (1択)	有	309	60.7
	無	180	35.4
	無回答	20	3.9
宿泊数 (1択)	日帰り	141	27.7
	1泊	129	25.3
	2泊	143	28.1
	3泊以上	63	12.4
	無回答	33	6.5
訪問地 (複数回答可) ⁴⁾ ※割合10%未満省略	城崎温泉	232	45.6
	豊岡市街地	188	36.9
	カバンストリート	79	15.5
	玄武洞公園	78	15.3
	城下町出石	68	13.4

品数」は、度数402、平均値3.05、最小値0、最大値20、標準偏差2.642、「訪問地合計数」は、度数509、平均値1.7、最小値0、最大値9、標準偏差1.64であった。両者とも、数か所を訪れ、1、2作品を鑑賞した回答者が多い一方、数値の高い比較的少数の回答者がいることが見て取れる。それ以外の5つの変数については、選択肢の数が決められており、順序尺度を前提とするSpearmanの相関係数を算出することから、回答の分布を示す(表3)。

「年間観劇回数」に関しては鑑賞経験者のほうが多いが、この演劇祭で初めて演劇を鑑賞した回答

者も一定数いる。また、演劇祭の主目的度の非常に高い回答者が大多数である。「演劇祭感想」、「演劇祭再来場意向」、「開催地再訪意向」は、評定値が高い回答者の割合が大きい。

なお、「演劇祭主目的度」、「年間観劇回数」、「演劇祭感想」、「鑑賞作品数」、「演劇祭再来場意向」、「開催地再訪意向」のそれぞれの無回答者の割合が全回答者の10%を超えている。これら6項目のうち、「演劇祭主目的度」以外は豊岡演劇祭2022の公式来場者アンケートの裏面に記載されており、無回答者の割合が比較的高かった理由としては、裏面

表3 分析対象変数の回答の分布

属性	選択肢	人数	割合 (%)
年間観劇回数 (1 択)	①今回が初めて	129	25.3
	②年に1 - 2回	117	23.0
	③年に3 - 4回	68	13.4
	④1 - 2カ月に1回	63	12.4
	⑤それ以上	75	14.7
	無回答	57	11.2
演劇祭主目的度 (1 択)	1	16	3.1
	2	16	3.1
	3	57	11.2
	4	363	71.3
	無回答	57	11.2
演劇祭感想 (1 択)	①良くなかった	3	0.6
	②普通	19	3.7
	③良かった	186	36.5
	④大変良かった	177	34.8
	無回答	124	24.4
演劇祭再来場意向 (1 択)	①行かない	7	1.4
	②わからない	93	18.3
	③たぶん行く	235	46.2
	④絶対行く	81	15.9
	無回答	93	18.3
開催地再訪意向 (1 択)	①行かない	7	1.4
	②わからない	60	11.8
	③たぶん行く	128	25.1
	④また行きたい	259	50.9
	無回答	55	10.8

の質問項目を見落とした回答者が多かった可能性等が考えられる。「演劇祭主目的度」については、表3に示す通り4を選んだ回答者が大半であり、主目的度の非常に高い回答者の中に、演劇祭の主目的度を段階的に考えてもらう設問を分かりにくいと感じた人がいた可能性が考えられる。

変数間の関係

表1に示す7つの変数間のSpearmanの相関係数を算出し、その有意確率を算出した結果を図1に示す。図1には5%水準で有意な相関係数のみを示している。なお図1は、例えば「鑑賞作品数」が「年間観劇回数」と「訪問地合計数」を媒介するといった、変数間の構造モデルを示しておらず、複数の変数ペア間の有意な相関関係を一括して視覚的に示しているのみである。

先述の通り、変数間の有意性は、本来は構造モデルの中で検証されるべきものである。また、ここではある変数の他の変数への影響に関する考察を行っているが、その検証も本来は両変数間の因果関係を仮定して行うべきものである。ここでは、各要因ペア間の相関関係に関して、あくまで将来の研究での検証モデル構築のための手掛かりを示すものとして、試行的に考察する。

まず、演劇祭の観光への空間的影響については、「訪問地合計数」と「年間観劇回数」、「鑑賞作品数」

との間に有意な正の相関関係がある。これは、回答者の訪問経験の一端を示す「鑑賞作品数」に加え、回答者の先有傾向に当たる観劇習慣が彼らの行動と正の関係を持つという、空間的影響の可能性を示唆すると考えられる。

演劇祭の観光への時間的影響については、「開催地再訪意向」と「年間観劇回数」、「演劇祭感想」、「演劇祭再来場意向」との間に有意な正の相関関係がある。これは、回答者の演劇祭に関する前向きな感想や再訪意向が彼らの行動意向と正の関係を持つという、空間的影響の可能性を示唆すると考えられる。また、ここでも、回答者の先有傾向に当たる「年間観劇回数」と彼らの行動意向との間の正の関係が示唆されている。

最後に、「演劇祭主目的度」と「訪問地合計数」および「開催地再訪意向」の間には有意な相関関係が見られなかった。その理由としては、「演劇祭主目的度」の評価が高い方に偏っている影響が考えられる(表3)。ただ、「演劇祭主目的度」と「年間観劇回数」、「鑑賞作品数」、「演劇祭再来場意向」の間には有意な正の相関がある。構造モデルの検証を行っていない本研究で解釈するには制約があるが、「演劇祭主目的」が、他の変数を介して、来場者の行動および行動意向と空間的、時間的に関係する可能性が指摘される。

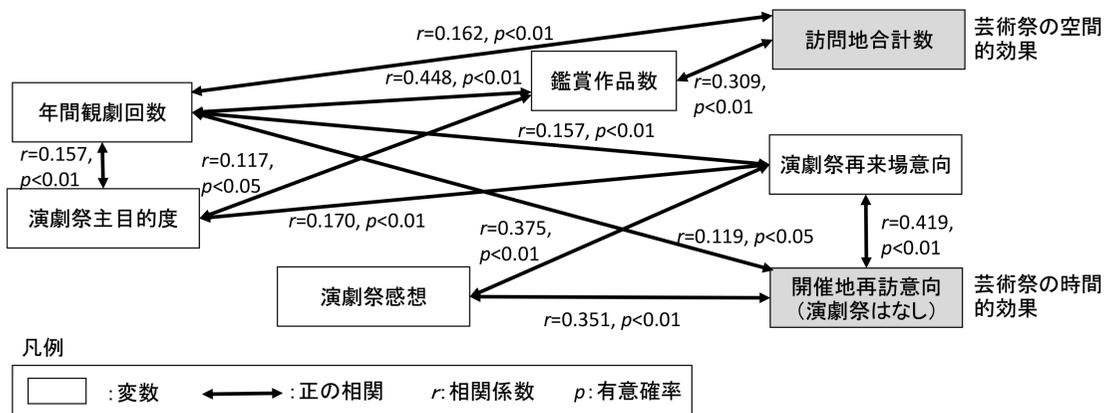


図1 変数間の相関係数 (Spearman) と有意確率

おわりに

以下に、本研究の結果得られた考察と、それを基にした、将来の「演劇祭による来場者の行動及び行動意向への時空間的影響」に関する示唆を示す。

会期中の回遊や会期外に開催地を訪れるといった「演劇祭来場者の行動および行動意向」と、演劇祭に関する経験・評価といった「来場者の会期中の経験に関わる要因」、および「来場者がもともと観劇に関して持っていた先有傾向」の間に有意な正の相関関係が見られた。従って、演劇祭の来場者行動への時空間的影響を説明するモデルには、回答者の会期中の経験に関わる要因に加え、回答者の芸術に関する先有傾向にあたる要因を組み込む必要性が示唆される。

また、本研究のデータから直接得られる示唆ではなく、豊岡演劇祭2022に関する著者の経験知に基づく推測にはなるが、「訪問地合計数」と「鑑賞作品数」間の正の相関関係に関しては、豊岡演劇祭の上演地が2市1町にまたがって広域的に散在しているため、多くの作品を鑑賞することが、場所の訪問意図の有無に関わらず多くの場所を訪れることに繋がった可能性がある。また、「開催地再訪意向」と「演劇祭感想」および「演劇祭再来場意向」の間の有意な正の相関関係は、演劇祭に関する前向きな評価や意向と、演劇祭のない時期の開催地への訪問意向との間の正の関係を示唆している。これも推測の域にはなるが、野外の行楽地を舞台にしたフリンジプログラム(直井ほか,2022)など、開催地の観光地としての魅力が演劇祭への参加経験に組み込まれている可能性や、演劇祭を開催している開催地だという認識が来場者の魅力の認知に繋がった可能性など、いくつかの可能性が考えられる。以上の可能性も踏まえ、将来の研究において検証モデル構築を目指すという方向性が考えられる。

なお、演劇祭の観光への時空間的影響同士(訪問地数と会期外に開催地を訪れる)の間に有意な相関関係が見られなかったことについては、来場者への制約的な影響が考えられる。例えば、訪問地数は、周遊したいという意図だけではなく、割ける時間、

自家用車の利用の有無などによる影響を受ける可能性がある。これらの変数の影響を明らかにするためには、滞在時間と行動範囲といった変数を将来の検証モデルに組み込むことも考えられる。

最後に、先述した「本調査の調査設計上の主な制約」以外の本研究の制約について述べる。まず、観劇経験がある回答者が多く、豊岡演劇祭が主目的の回答者が大半であったという、回答者の特性の偏りが指摘される。より観劇経験の少ない、豊岡演劇祭が主目的ではない回答者のデータを取ることができれば、本研究とは異なる「演劇祭による来場者の行動および行動意向への時空間的影響」が見られる可能性がある、ただし、本研究は全数調査ではないため確言はできないが、豊岡演劇祭2022はそもそもそのような層の来場者が少ない演劇祭だった可能性もある。演劇祭は、開催地、上演作品などにバリエーションがあるため、比較が容易ではないが、より観光を主目的とする来場者が多い演劇祭での調査を並行して行い、結果を比較的に考察することは考えられる。

また、アンケートへの回答数が、本研究の分析対象外の開催地居住者を合せても、演劇祭の延べ来場者数の10%以下と高くはないことも制約である。もっとも、「鑑賞作品数」の記述統計が示すように、複数の作品を鑑賞した来場者は少なくないと思われる、開催期間を通して1度だけの回答依頼したアンケートへの回答数と演劇祭の延べ人数を比較する際には注意が必要である。更に、個別の質問項目に関しては、おしなべて各訪問地を選択した回答者の割合が大きくない。この背景としては、本当に回答者の訪問地が少ない可能性もあるが、選択肢の多さが回答する意欲を低めた可能性や、場所の名前を知らない、あるいは覚えていないなどの理由で、実際は訪問しているが訪問したことを認識していない可能性が考えられる。また、選択肢として用意した場所のいくつかは同演劇祭のプログラムやイベントの会場と重複するため、回遊目的による訪問地と観劇による訪問地が区別できないという課題もある。以上の課題の解決のためには、アンケート調査で得られるデータとの同期の難しさはあるが、

GPS ログデータなど、回答者の想起に頼らない自動的取得が可能な行動データの活用が考えられるかもしれない。

謝辞

本研究のために、豊岡演劇祭2022公式アンケート調査のデータの活用を許可して下さり、アンケート設計に当たって、本研究に資する質問項目を組み込んでくださった、豊岡演劇祭実行委員会ならびに豊岡市環境経済部大交流課の皆様には謝意を表する。

注

- 1) アンケートを配布したメイン会場は以下の通りで、ディレクタープログラム(城崎温泉内各会場のみ、フェスティバルプロデュース)への来場者を対象に配布した：豊岡市民会館、豊岡市民プラザ、芸術文化観光専門職大学静思堂シアター、城崎温泉内各会場(さんぼう西村屋本店、三木屋、おけしょう鮮魚海中苑駅前店、城崎町家地ビールレストラン、GUBIGABU、RESTAURANT Ricca)、城崎アートセンター、但馬漁業協同組合竹野支所、氣多神社、出石永楽館、大生部兵主神社、やぶ市民交流広場、香住区中央公民館
- 2) 個人情報の収集にあたっては、氏名無記名方式、WEBアンケート(Google Form)では回答者のメールアドレスが収集されない方式とし、回答した特定の個人を識別することができないようにした。筆者3名の本務校(大学)では、本研究実施後の令和5年3月20日から施行された研究倫理委員会実施要領で「研究倫理審査申請に関する判断用のフローチャート」が示され、そこでは「既に匿名化されている情報(特定の個人を識別することができないものであって、対応表が作成されていないものに限る。)のみを用いる研究」は「基本的に申請不要」とされている。本研究は同校の研究倫理審査を経ていないが、同要領の適用後に調査が実施されたとしても、同校の研究倫理審査申請が必要な研究とはみなされないと判断される。
- 3) 「taking a trip to a main destination outside his/her usual environment, for less than a year, for any main purpose, other than to be employed by a resident entity or organization within the country or locality visited.」と定義される。
- 4) 全選択肢は以下の通りである：城崎温泉、城崎マリワールド・日和山、気比の浜海水浴場、玄武洞公園、豊岡市街地、カバンストリート、コウノトリの郷公園、竹野海岸、神鍋高原、植村直己冒険館、城下町出石、たんとう花公園、安国寺、但熊、シルク温泉、氷ノ山、ハチ高原、若杉高原、養父神社、名草神社、おおやアートBIG LABO、木彫フォークアートおおや、山田風太郎記念館、明延鉦山、大乘寺、余部鉄橋、かすみ・矢田川温泉、その他

文献

- Funk, D.C., Toohey, K., & Bruun, T. (2007). International sport event participation: Prior sport involvement; destination Image; and travel motives. *European Sport Management Quarterly*, 7 (3), pp.227-248.
- Hughes, H. (2000). *Arts, entertainment and tourism*. London: Routledge.
- 直井岳人・野津直樹・河村竜也(2023)「演劇祭来場者の動機と回遊行動に関する概観：開催地内の回遊性向上を目指して」『芸術文化観光研究』第1号、pp.141-150.
- Tahana, N. & Opperman, M. (1998). Maori cultural performances and tourism. *Tourism Recreation Research*, 23 (1), pp.23-30.
- 豊岡演劇祭実行委員会(2022) 豊岡演劇祭2022事業報告書(2023年3月3日閲覧) <https://toyooka-theaterfestival.jp/wp-content/uploads/2022/11/%E8%B1%8A%E5%B2%A1%E6%BC%94%E5%8A%87%E7%A5%AD2022%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>
- UNWTO (2008). *International recommendations for tourism statistics (IRTS)*. Department of Economics and Social Affairs, Statistics Division. Available at <http://instats.un.org/unsd/trade/IRTS/IRTS%202008%20unedited.pdf>
- Yoon, Y., & Uysal, M. (2005). An examination of the effects of motivation and satisfaction on destination loyalty: A structural model. *Tourism Management*, 26 (1), pp.45-56.